

## 〈資料紹介〉文化二年写、衣川長秋記事について

丸 山 健 一 郎

### 一、はじめに

従来、衣川長秋<sup>①</sup>（きぬがわ・ながあき、一七六六明和三年一八二三文政六年）の紀行文としては、『田蓑の日記』（一八二二文政五年刊）と『やつれ蓑の日記』（一八二三文政六年刊、「美德山記行」「雨瀧記行」も併載）の二書が知られている。

本稿は、衣川長秋が本居宣長（もとおり・のりなが、一七三〇享保三年一八〇一享和元年）の用問の為に松坂へ赴いた際の記行とみられる写本について翻刻を示し、新出資料として報告するものである。問題となる箇所は、『鴨長明道記<sup>②</sup>』の写本の後方に記されており、奥書から「文化二年八月」の書写であることが知られる。個人蔵の資料であるため、末尾に図版を附して記事の全体を示す。

### 二、書誌的事項および凡例

○寸法…縦二十四・五糎、横十七・五糎。○装丁…写本、楮紙、袋綴、四ツ目綴、中本、一冊。○表紙…藍表紙、雷文繫（空押）。○題簽・外題・頭題・尾題…なし。○構成…丁付なし。一丁、三十九丁、四十八丁は白紙。都合、墨付四十五丁。一丁（白紙）、二丁（三十八丁、三十九丁（白紙）、四十丁（四十七丁、四十八丁（白紙）））  
\* 一丁と四十八丁は表紙と裏表紙からの剥離とみられる。○奥書…四十七丁表「文化二年乙丑秋八月謹而寫之／鎌田源太輔吉治」○備考…小口書き「鴨長明道記」○所見…二丁（三十八丁は漢字平仮名交じり文を連綿体で記す。下小口に墨書の通り『鴨長明道記』の写本である。本文の異同から、おそらくは一六四八正保五年（慶安元年）版を基にした写本とみられる。四十丁（四十七丁は漢字片仮名

交じり文を放ち書きで記す。但馬国にいた衣川長秋が、母からの便りにより師である本居宣長の死（享和元年長月二十九日）を知って松坂へ向かい、同地で鈴屋門下の植松有信らと亡師を悼み、和歌の贈答などをした事績が記される。奥書にみえる「鎌田源太輔吉治」については未詳。

翻刻に際しては、以下の方針に従う。

- ① 変体仮名は、通行字体に改める。
- ② 踊り字「ゝ」は残し、くの字点は「ゝゝゝ」で示す。
- ③ 見せ消ちは、「○」「見せ消チー□」として示す。

〔例〕石〔見せ消チー山〕室ノイハムロヤニ宿シメテ

（四十二丁裏六行目）

- ④ 誤写が疑われる箇所については、右傍に「ママ」を附す。

三、翻刻（四十丁表～四十七丁表）

（四十丁表）

衣川長秋

但馬国ニアリケル

ホト京ナル母ノモ

トヨリトミノヨシ

ニテフミオコセタリケ

リイソキヒラキ見レ

ハ師ノ君イニシ

ナカ月廿九日ニ身

（四十丁裏）

マカリタマヒヌトアレバ

オドロキテ

思イ〔見せ消チーヒ〕キヤ世ハ常ナシトシレ、トモ

カ、ルハカナキフミヲ見シトハ

アケクレニツカヘテマシヲワカ大人ノ

カ、ラン事トカネテシリセバ

ソノ日ハ十月

廿九日ナリケレハ

（四十一丁表）

イセニアリテツカヘテアラハ長月ノ

ケフノワカレニアハマシ物ヲ

人皆ニ三十日オクレテワレハモヨ

三十日ノナケキ一日ソナ〔見せ消チース〕ル

ソノ日カシコライテ

タチテ京二一日ヲリ  
テイソキニイソキテ  
霜月十二日イセノ

(四十二丁裏)

国ニキテヤカテ山室  
ノミハカニマウテ、  
足引ノ山室山ノイハムロニ  
萬代ナカクカクリマス君  
思ヒキヤイハネシマキテマキノタツ  
アラ山中ニミネマサントハ  
コヒマロヒアシスリヲシテナケ、トモ  
カクレシ大人ニマタアハメヤモ

(四十二丁表)

師ノヲモヒニテ  
ヌル夜オチズ夢ニミ面ハ見マツレト  
ウツ、ニ一目マミヘテシカモ  
萬代ニオハシマサネトコノミシ  
大人ニワカレテイケリトモナシ

文化二年写、衣川長秋記事について

古叟ノマス<sup>マツ</sup>テノカ、ミクモレルヲ  
トキアキラメシハヤ秋津彦  
コトノハハイヤヒロマリテ萬代ニ

(四十二丁裏)

サキニホウランサクラネノウシ  
<sup>マツ</sup>十月十八日人々ト  
共ニミハカニマウテ、  
コトトハ又石ニムカヒテケフモマタ  
ツキヌ思ヒノナケキヲソスル  
石〔見セ消チー山〕室ノイハノムロヤニ宿シメテ  
萬代ナカク花ヲ見ルラン

(四十三丁表)

春庭主開講日  
故大人ノ君ニ  
ツキテ春庭  
ノ君書トキ  
タマヘルトキ、テ  
鈴ノ屋ノ鈴ノネタヘス天ノ下

文化二年写、衣川長秋記事について

四方ノ國ニナリワタル〔見セ消チーラ〕ナン

(四十三丁裏)

鈴ノ屋トイフハ本居翁

ノ家号也何亭何軒何

庵何堂何舎トイフト同シ

叟ナリ翁先年イセ

大神宮へ參詣ノトキ

五十鈴川ニテ鈴ヲヒロヒシ

コトアリ夫ヨリ鈴ノ屋

ト名ツケシ也

衣川長秋

尾張ノ国人植松ノ君師ノ君

ノウツシ世ニオハシマシタマヒシ

(四十四丁表)

時ヨリ身マカリタマヒテノ、

チモ御墓ニイトネモコロニツカ

ヘマツリタマヒシコトヲ思ヒテ

ヨミテオクル

オシヘネハコ、タアレトモワカセネニ

マシテツカヘシ人アラメヤモ

師ノ君ノミウセタマヒシヨリニ

植松君ニハジメテアヒテウツシ

(四十四丁裏)

世ニオハシマシ、ムカシノ叟

ナドカタラヒテ

ウヒニアヒテキクモカタルモタヒコロモ

カタミニカクルソテノシラツユ

ス川ノ里ニ旅ヤトリシタマフ

衣川先生ノ御許ニマキリテ

植松有信

シタヒ來ヌス川ノ里ニタヒ居スル

(四十五丁表)

ミヤコノ人ノフカキコ、ロラ

カヘシ

長秋

心サシアツタニモリノシタ露ノ

フカキメクミヲワレニカケナン

植松君ノ名コ屋ニカヘリ

マス時ニ

ナキ大人ヲシノフ袂ノカワカヌニ

マタ露カ、ルケフノワカレヂ

(四十五丁裏)

春ノハシメニヨメル

ホノ、ト難波ノアシノメモハルニ

八十島カケテカスムノトケサ

チトリナクサホノ河川(見セ消チ一原)ノカハヤキノ

モエテハルメク時ハ來ニケリ

春霞カスメル野ヘニウチムレテ

花見アソバシ時ハ來ニケリ

セトウカ

(四十六丁表)

日ノ本ノモトツミクニユカスミノメツ、

モロコシノカラ国カケテ春ヤ立ツラン

ウメラヨメル

文化二年写、衣川長秋記事について

ワキモコココロモ春風吹ソメテ

カキ根ノ梅ハホコロビニケリ

冬コモリフ、ミテアリシウメノ花

春來ニケリト咲テニホヘリ

年ノクレニヨメル

(四十六丁裏)

年ノ緒ノヨリクルコトヲナケキツ、

花見ル春ヲカツイソグカナ

山家歳暮トイフ意ヲ

世ノウキライトフ深山ノオクニテモ

ナケキコリツムトシノクレカナ

白髮如雪トイフ意ヲ

婦<sup>マコ</sup>リ末サル老ノカシラハミナ月ノ

モチニモキエヌミユキナリケリ

(四十七丁表)

源長秋

文化二年乙丑秋八月謹而寫之

鎌田源太輔吉治

## 四、おわりに

以上、衣川長秋が本居宣長の申問に松坂を訪れたことを記す文化二年書写の本文について、翻刻を示した。近世の紀行文は筆写・転写のままにとどまって知られないことが多い。『訂正古訓古事記』の出版に携わり鳥取藩国学の祖とも言われる衣川長秋の場合には、

『田養の日記』『やつれ蓑の日記』を版本として遺したが、紀行文以外にも写本のまま伝存する著作が知られている。そうした資料の一つ一つを掘り起して総合的に検討することが、衣川長秋の事績にとどまらず、たとえば鈴屋門下における紀行文の位置付けや学術知識継承の様相など、少し大きな枠組みを理解する足掛かりとなる筈である。

## 注

- ① 山本（一九五八）、竹内（一九六九）、岡中・鈴木・中村（一九八四）、山根（一九八八）、高倉（二〇〇一）によれば、衣川長秋の通称は宰記また直記、号は瓊斎。伊勢国壹志郡須川の人で、本姓は池田氏。宣長の『授業門人録姓名録』自筆本では寛政三年の条に「須川村 池田辰三郎 周令」とあり、追加本では本居清造の頭書「池田氏ハ本居家ノ一族ナリ、周令後二因州鳥取ヲ衣川氏ヲ嗣ギ、長秋ト改ム、文政五年二月十日、大坂ノ門人中嶋豊足ノ家ニシテ歿ス、五十八歳、伯耆國二古學ヲ開ケル人

ナリ」が附される。版本では寛政二年の条に「一志郡須川後因州鳥取衣川宰記長秋」とあるという。生母「あさ」が本居宣長の父定利の弟躬充の末子であり、本居家の姻戚である。鈴屋門下として国学を修め、京都に国学の学校を興す志を立て上洛するも果たさず、因幡国八上郡狭貫村の都波只知神社社司であり因幡に国学の師を招聘すべく上洛中であつた国本道男と出会い、鳥取に赴く。一八〇〇寛政十二年に鳥取東照宮神官縁故の者として届け出た。鳥取県（一九七六）所収「因府年表」享和元年四月廿四日の条に「勢洲之浪客衣川舍人と云歌学者来り、今日於伊吹左仲宅一初て開講。後足留料若干を賜ふ」とある。享和三年に正式な滞留を許され、年分銀十五枚を与えられた。国学を講じ因幡伯耆の歌道隆盛の基をなした。門下には、飯田秀雄・白井治堅・遠藤元貞・加須屋武義・国本道男・小林大茂・佐治景嶺・鷺見休明・鷺見安歌・田代恒親・中島宜門・森恒安・米原豊秋などがおり、その数凡そ三百人と称されたという。人柄については「長秋形軀壯大才弁超倫」「從遊類盛」などの記述が残り、大柄な体格で弁舌に長け、諸方を遍歴することも多かったようである。倉吉・米子等へも出講したという。本稿で紹介する資料では、宣長の死を但馬で知ったことが記される。宣長没後は春庭に師事する。文政五年八月に息子の源太郎を伴い上洛の途につく。京都では麩屋町夷川下る付近の庖丁屋の裏座敷で古医書である『大同類聚方』の異本校合に没頭したという。『田養の日記』『やつれ蓑の日記』の刊行準備も進めていた。過勞の為か発病し、一八二三文政六年二月十日巳上刻、大坂の門人中嶋豊足の家で客死。享年五十八歳。『百人一首峯梯』

『倭読要領辨』『新古今集渚の玉』などの著作が今に伝わる。遺骸は遺言に従い大坂の圓珠庵にある契沖の墓の傍に葬られたという。現在も一月二十五日の契沖忌には墓参が可能である。但し墓碑は剥落し確認できない。石田（一九二七）に本居大平撰の碑文全文を見ることが

できる。但し山本（一九五八）によればこれは長秋の死後数年を経てから起草されたもので没年を「文政五年」と誤っており、諸書に影響を及ぼしている。遺髪は鳥取城外雲山村（面影山）に埋葬され、門人により正学院と謚されたという。鳥取市にある臨濟宗妙心寺派の広徳禪寺の過去帳には「正學院霞峰直道信士／葬于大坂高津圓珠庵 文政六年／癸未二月 衣川宰記」とある。安藤正次（一九三〇）や皇典講究所（一九三〇）、工藤（一九八九）が示すように、衣川長秋の事績としては、本居宣長の『訂正古訓古事記』出版に際して、京都の書肆である汲古堂・河南儀兵衛（共利）との間で仲介役を務めたことが知られる。松田（一九七三）によれば、長秋を養子に迎えた衣川橋立女は和歌をたしなみ、当代の女流歌人として著名であったという。『大同類聚方』の校合と注解は鈴屋門下で盛んであり伴信友や本居大平にも関連の著述がある。遺言で中島豊足に出版を託したが豊足も病没し、開板には至らなかったという。

② 『長明道之記』『鴨長明海道記』などと並ぶ『東関紀行』の異名である。福田（一九八四）、大曾根・久保田（一九九〇）武田（一九九四a）、長崎（一九九四）などによれば、『東関紀行』は、一二四二仁知三年八月、京都から鎌倉までの作者の旅の様子を記した紀行文である。執筆・成立年代についても諸説あるが、近年は旅の直後に執筆されたとする説が有力である。近世において『東関紀行』は、『海道記』とともに、鴨長明・源光行らの作と擬せられた。また『海道記』を模した作品とする説もあるが、決定的な結論は提出されていない。正保五年板本でも外題は『長明道之記』『鴨長明道の記』と異なる場合があるようである。

③ たとえば、大沢（一九六五）により四十以上の紀行文を残したことが知られ、菱岡（二〇〇四）、菱岡（二〇〇九）により曲亭馬琴と交流の深い紀行作者であることが明らかにされ、板坂（二〇一一）には近世紀

行の到達点と評される『陸奥日記』の作者・小津久足（おづ・ひさたり、一八〇四文化元年一八五八安政五年）の作品は写本でしか伝わっていないという。

#### 参考文献

- 安藤 正次（一九三〇）『訂正古訓古事記の校刻について』『国学院雑誌』第三十六巻五号、五〇―五九頁。
- 石田誠太郎（一九二七）『大阪人物誌正編』石田文庫。
- 板坂 耀子（二〇一一）『江戸の紀行文』中公新書二〇九三。
- 大沢 美夫（一九六五）小津桂窓稿本「記行」の部『語文』第二〇号、五六―五九頁。
- 大曾根章介・久保田淳（一九九〇）『東関紀行』福田ほか校注（一九九〇）一二五―一五三頁。
- 岡中正行・鈴木淳・中村一基（一九八四）『本居宣長と鈴屋社中―『授業門人姓名録』の総合的研究―』錦正社。
- 家臣人名事典編纂委員会（一九八八）『三百藩家臣人名事典』第五巻、新人物往来社。
- 工藤進思郎（一九八九）新出の河南儀兵衛宛本居宣長書簡をめぐって―『訂正古訓古事記』刊行の一資料。『書簡研究』第二巻、一五―三三頁。
- 皇典講究所（一九三〇）本居宣長大人の書翰に就いて。『国学院雑誌』第三十六巻九号、七五―七八頁。
- 竹内吉次郎（一九六九）衣川長秋。鳥取県（一九六九）所収「藩士列伝三」三五八頁下段三六〇頁上段。
- 高倉 一紀（二〇〇二）衣川長秋。本居宣長記念館（二〇〇二）一一九頁、中段下段。
- 武田 孝（一九九四a）『東関紀行全釈』笠間注釈叢刊一六。

—— (一九九四b) 『東関紀行』 解題。武田(一九九四a) 三三三-

三七八頁。

鳥取県(一九六九) 『鳥取藩史』 第一卷、鳥取県立図書館。

—— (一九七六) 『鳥取県史』 第七卷、鳥取県。

長崎 健(一九九四) 東関紀行。長崎ほか校注・訳(一九九四) 一〇五-

一三九頁。

—— ほか校注・訳(一九九四) 『中世日記紀行集』 新編日本古典文学全集四八。

日本古典文学大辞典編集委員会(一九八四) 『日本古典文学大辞典』 第四卷、岩波書店。

菱岡 憲司(二〇〇四) 小津久足「陸奥日記」について。『語文研究』 第

九八号、二二三四頁。

—— (二〇〇九) 馬琴と小津桂窓の交流。『近世文藝』 九〇、一六一-

二九頁。

福田 秀一(一九八四) 東関紀行。日本古典文学大辞典編集委員会(一九

八四) 四〇三頁。

—— ほか校注(一九九〇) 『中世日記紀行集』 新日本古典文学大系

五一、岩波書店。

松田 重雄(一九七三) 『鳥取市龍峯山広徳寺縁起』 広徳寺護法会並授

戒・梵鐘推進委員会。

本居宣長記念館(二〇〇二) 『本居宣長事典』 東京堂出版。

山根 幸恵(一九八八) 衣川長秋。家臣人名事典編纂委員会(一九八八)

三三六-三三七頁。

山本 嘉将(一九五八) 『近世和歌史論』 文教図書出版株式会社↓(一九九

二) 修正復刻版。パルトス社。

付記

このたびの資料紹介にあたり、臨濟宗妙心寺派龍峯山広徳禪寺ご住職の高垣大法氏より過去帳の一部影印と『鳥取市龍峯山広徳寺縁起』のご恵投に与った。記して深甚の謝意を呈する。

十月廿五日... 衣川長秋

但馬国ニアリケル  
 ホト京ナル母ノモ  
 トヨリ登ミノヨシ  
 ニテフミオオセツリケ  
 リイノキヒラキ見レ  
 ハ師ノ君イニシ  
 十カ月廿九日ニ身

二カリノミヒ又トアレバ  
 オトロキテ  
 思ハキヤ世ハ常ナシトシレトモ  
 カ、ルハカナキフミヲ見シトハ  
 アケクレニツカヘテミシヲワカズ人ノ  
 カ、ラン事トカ子テシリセバ  
 ソノ日ハ十月  
 廿九日ナリケレ、

イセニアリテツカヘテアラハ長月ノ  
 ケフノワカレニアハミシ物ヲ  
 人皆ニ三十日オクレテワレハモヨ  
 三十日ノナケキ一日ニノナル  
 ソノ日カシコライテ  
 夕チテ京ニ一日ヨリ  
 テイノキニイノキテ  
 二霜月十二日イセノ

国ニキテヤカテ山室

ノミハカニウテ

足引ノ山室山ノイハムロニ

萬代ナカクカクリニス君

思ヒキヤイハ子シニキテニキノタツ

アラ山中ニミ子ニサントハ

フヒニロヒアシヌリヲシテナケトモ

カクレシ大人ニマダアハメヤモ

師ノヲモヒニテ

ヌル夜オナカ夢ニミ面ハ見ツレト

ウツニ目ニミヘテシカモ

萬代ニオハシニヤ子トコヒノミシ

大人ニワカレテイケリトモナシ

古更ノニステノカ、ミクモレルヲ

トキアキラメシハヤ秋津彦

コトノハハイヤヒロコリテ萬代ニ

サキニホウランサクラ子ノウシ

十月十八日人々ト

共ニミハカニウテ

コトトハ又石ニムカヒテケフモニタ

ツキ又思ヒノナケキヲノスル

山室ノイハムロヤニ宿シメテ

萬代ナカク花ヲ見ルラン

春庭主閑講日

政大人ノ君ニ

ツキテ春庭

ノ君書トキ

メマヘルトキテ

鈴ノ屋ノ鈴ノ子ツヘス天ノ下

四方ノ國ヘミナリツタルナン

鈴ノ屋トイフハ本居翁  
ノ家号ニ何亭何軒何  
庵何堂何舎トイフト同  
意ナリ翁翁先年イモ  
大神宮ニ参詣ノトキ  
五十鈴川ニテ鈴ヨロヒ  
コトアリ夫ヨリ鈴ノ屋  
ト名ツケシ

衣川長秋

尾張ノ國人植松ノ君師ノ君  
ノウツシ世ニオハシマシクモヒシ

時ヨリ身ニカリクモヒテノ、  
ナモ御墓ニイト子モコロニツカ  
ヘニツリタマヒシコトヲ思ヒテ  
ヨミテナクル

ヨシヘ子ハコトアレトモワカセ子ニ  
ニシテツカヘシ人アラメヤモ  
師ノ君ノミラセタミヒシヲリニ  
植松君ニハジメテアヒテウツシ

文化二年写、衣川長秋記事について

世ニオハシシ、ウカシノ夏  
ナドカタラヒテ

ウヒニアヒテキクモカタルモタヒコロモ  
ガクニニカクルソテノシラツユ

又川ノ里ニ旅ヤトリシタコ  
衣川先生ノ御許ニサリテ

植松有信

シメヒ来ヌス川ノ里ニタヒ居ヌル

ミヤノ人ノフカキコ、ロヲ  
カ、シ

長秋

心サシアツタノモリノシタ露ノ  
フカキメクミヲワレニカケナン

植松君ノ名コ屋ニカハリ  
ニヌ時ニ

ナキ大人ヲシノフ袂ノカハカヌニ  
ニタ露カ、ルケヲノワカレナ

春ノハシメニヨメル

ホクノト難波ノアシノメニハルニ

八十島カケテカスルノトケサ

ナトリナクサホノ河川河原ノカハヤキノ

モエテハルメク時ハ来ニケリ

春霞カスメル野ヘニウチムレテ

花見アノバシ時ハ来ニケリ

セトウカ

日ノ本ノモトツミクニユカスシメメツ、

モロコシノカラ固カケテ春ヲ立ラン

ウメヲヨメル

ウキモツカコロモ春風吹ノメテ

カキ根ノ梅ハホコロビニケリ

冬コモリフ、ミテアリシウメノ花

春来ニケリト咲テニホヘリ

年ノクレニヨメル

年ノ緒ノコリノコトヲナケキツ、

花見ル春ヲカツイソグカナ

山家歳暮トイフ意ヲ

世ノウキヲイトフ深山ノ於クニテモ

ナケキコリツムトシノクレカナ

ノ白髪如雪トイフ意ヲ

婦リホサル老ノカシラハミナ月ノ

モナニモキエヌミニキナリケリ

源長秋

文化二年乙丑秋八月壁而寫之

鎌田源太輔吉治